

資料紹介 ニホンジカの頭骨標本の

収集と利用 広谷 彰 (外来研究員)

神奈川県立生命の星・地球博物館(以下、博物館と呼びます)には、「国内で唯一」「最古」などの形容詞のついためずらしく貴重な標本がたくさんありますが、ひとつひとつはめずらしくなくても、複数集まって価値を持ってくる標本もあります。今回紹介するニホンジカの頭骨はそのような標本です。ここでは、これらの標本が博物館に集まるようになった経緯と、この標本を使って現在進行している研究について紹介したいと思います。

これまでの収集の経緯と今後の方針

博物館のニホンジカの頭骨標本はほとんどが丹沢山地のものです。丹沢のシカは狩猟や有害駆除のターゲットとなり、保護区では生息環境が悪化しているため、その生息状況は厳しいものです。また、シカが森林に与える被害も深刻です。総個体数や性年齢構成が不明のまま、有害鳥獣駆除や狩猟が許可され、しかも捕獲個体の年齢や体格、栄養状態等の情報を把握するシステムさえ不完全です。このような状況は、一刻も早く改善されなければなりません。そのため、適正な保護管理計画がたてられ、早急に実行されることが望まれます。しかし、具体的な計画をたてる基礎となるデータが不足しています。

そこで、主として県立自然保護センターに収容された救護個体を中心に、野生動物の捕獲地や体格・臓器重量・脂肪蓄積等に関する情報を共有化していくプロジェクトが始まりました(野生動物に関する情報交換会)。1997年より始まったこの交換会は、県立自然保護センターを中心に組織されています。自然保護センターに収容された救護個体は死亡後センターで解剖され、各サンプルが担当各機関へ送られます。そして、解析後のデータは再び自然保護センターに集められ管理されます。集められたデータは研究や



博物館に収蔵されるニホンジカの頭骨標本。

保護管理計画の立案が今後スムーズになされるように、定期的に公表されます。このプロジェクトの一環として博物館では、頭骨標本をつくり、保管する作業をしています。現在、約150頭分の頭骨があります。

標本の利用

これらの標本を利用しておこなった研究をひとつ紹介したいと思います。私は雄シカの体の大きさとそれに対する角の大きさを調べてみることにしました。生息環境の変化にともなって、昔と今のシカの体格や角の大きさになんらかの相違があるかもしれません。ここでは研究の内容については詳しく述べませんが、環境条件や角の進化とからめていくつかの仮説をたてて頭骨や角の測定をしています。予測通りの結果が得られるかはまだわかりませんが、測定をしながら思ったのは、昔の標本がもっとたくさんあればということでした。そうすれば現在と過去で、より正確な比較ができます。しかし、以前のものはそのときどきの経緯で集めたものであり、また研究分野によってどのような標本がどの程度必要かは異なるので、これはやむをえません。これらの

経験は今後どのような方針で資料を収集するかを判断する手がかりになります。また、現存する資料をいかにうまく活用するかは、研究をする側の工夫にかかってきます。

一般的に標本数が多いほど研究のテーマが広がり、結論の信頼性が増すとはいえ、収蔵スペースには限りがあります。しかも、昔のものほど希少ですから、古くなったから処分するというわけにはいきません。現在、情報はますます圧縮され、小さな電子メディアに百科事典がおさまってしまう時代ですが、博物館の資料はなんといっても現物が価値をもちます。そこで、将来を視野に入れた効率的な収集方針と有効な利用にむけての情報の公開がぜひ必要になります。

自然科学のとびら

第4巻第3号(通巻第14号)

1998年9月15日発行

発行 神奈川県立生命の星・地球博物館

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

e-mail: plan@pat.net.ne.jp

発行人 濱田隆士

編集 佐藤武宏

印刷所 フルサワ印刷株式会社

自然環境保護のため再生紙を使用しています